

精神の修養と大和魂

醫學博士男爵 高 木 兼 寛

御案内の通り、私は専門とする處は醫道でありまして、其他の事に亘る學問には甚だ知識の淺い方でありますからして、今夕標題と致しました様な事に就いてお話を申し上ることは敢て當らぬと思ひますけれども、多年の間學校を預かり、青年に對して多少道徳的指導を與へまするに就いて、成可く解り易く教ゆることが出来るやうな道を講じたいと思ひまして、多年考へて居りました末に、是れならば一番解り易くはあるまいかと思ふことが何うか斯うか纏まりましたからして、之を話しまして諸彦の教示を仰いで居るのであります。今夕も幸に加藤君の深切なるお辭にあまへて罷出て一場のお話を申し上るのは私の甚だ喜ぶところでございます。甚だお聽苦しいことであらうかと思ひますが暫く御清聽を煩はします。

演題として申上げて置いたのは精神の修養と大和魂であります。就きましては、先以て精神とは何ぞといふ問題を明かにしたいと思ひます。本來は精神なるものは宇宙に遍滿する所の一大勢力であるけれども、見ることが出来ないものである。併ながら其存在は宇宙の新羅萬象の活動によつて見ることが出

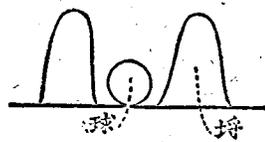
來て居ると認めて居ります。其故に吾人の身體に存する所の精神と稱するものは蓋し其一部と云ふのはかないと思ひます。而してこの精神は如何なる性質のものであるかと申せば、見ることは出来ない、けれども、其作用たるや間斷なく繼續して居るものと信じて何う云ふ工合に働らいて居るものであらうぞと云ふ問題を掲げていろ／＼と考慮したのでありますが、兎に角精神(心)と云ふものは始終働き通してあつて之れに句切をして初めて吾々が事物を識別するの基礎となるものと云つて宜しくはないか。譬へて申せば、精神の働きも時計の働きに於けるが如くで、即ち音響で申せば(鞭にてゆるやかに黑板をたたきコツ／＼コツ／＼と云ふ音を以て形容す。)此の如く働き居るものゝ様に思はれます。而して其働きが止まるゝ又働く、又止まる。斯う云ふやうな働きを爲して居ります。邦語に「コト」と云ふ言葉があります。その「コト」(事)と云ふのは「心止」と書くのが本當であるそふでございませう。即ち斷へず働いて居るものが止まり。次次に止まれば一つなぎづゝの「コツ／＼」と全く相符合する如くに思はれるのであります。而してこの心即ち魂たましいなるものは、なせ心と云ふか、魂と云ふかといふことに就いて考へて見たのであります。これは牽強附會と仰しやれば素より論はない。去乍ら、自ら考へますに、形象文字にしても、意義に由て拵へた文字にしても、畢竟是れが適當であらうと附會したものに過ぎない。斯様な考を以て、即ち魂と云ふことは十方世界自在に働くといふ作用を精神が有つ處から圓い形の球に譬へたものであらうと思ふ。そこで魂と云ふものは誠に牽強附會的の様でありますけれども、球たまの様やうなと云ふ意味を含

居るものと私は信じて居ります。

此に一つの護謨球があります。(實物を以て説明)。魂の機轉を察するに、平面盤に載せたる球の機轉同様に思はれます。此球は外來の刺戟に反動し。刺戟が強くなればなるほど反動力も強くなり。(鞭を以て球を動かし或は叩いて外物刺激の狀を示す)。前後左右にも、上にも下にも動く。魂も同じことで、何か刺激があれば必ず反動す。人が激すると云ふことは即ち外來の刺激の強いのに對する反動であつて。今まで笑つた人を怒らすことも出来るし、怒つて居る人を笑はすことも出来る。此の如き有様なるを以て魂と云ふ語は球の様な働きをする意味合のものだと思ひます。そこで今茲に茶碗があります。之を動かせば茶碗自身の位置が机に對し變はるのみであります。併ながら球の如く圓いものは決して然う往きませぬ。今まで下になつてゐた部分が横になり上になつて居た部分が同じく横になり横になつて居た部分が上下になる。球を轉々して位置變換の狀を示す。斯様にかはりかはると云ふ意味合になります。即ち一は机と球の關係がかはり二は球自己の位置がかはるのであります。言葉を換へて申せばコロコロといふ言葉は此の如き運動の意味を示したものと思ひます。コロコロといふ言葉はつまりコロコロ(心)と云ふ言葉になつて居るのであります。コロコロの初のロの字を一つ除けばコロコとなります。之れを以て是を觀ればコロコ(心)とはかはりかはるの意味であります。今申しました如く、怒つて居るかと思へば笑ひ、笑つて居るかと思へば泣くと云ふ様に、始終かはると云ふ意味であると思ひます。左の歌杯は矢張

り同様の意味合のもの、如くに思はれます。「心こそ心まよはず心なり、心に心、心ゆるすな」取りも直さず球の轉々する意味に外ならぬやうに思ひます。

精神と稱するものは斯様なものである。而して之をして正しく行動せしむるには如何すべきかと云ふ問題であります。極く通俗な喩でありますが、御承知の埒と云ふものがあります。競馬場に木柵を繞らして馬を其間に乗入れて走驅せしむれば競馬の目的を達するが如く吾人の心にも同様一つのキマリ(極、



規律)がなければならぬ。之を埒と云ひます即ちキマリであります。平たく言へば、法律とか規律とか云ふものは凡てキマリであります。此キマリを正しく守り得る人を高德の人と申します。之を守る事の薄き人を薄徳の人と云ひ又キマリを全く守らない人があります。斯様な人を名づけて不徳な人と云つて俗に不埒な人と申します抑不埒と云ふ言葉は是れから出たものと思ひます(第二圖を見よ)高德、薄徳、不徳と云ふ事は一定のキマリを守り得る程度の名稱であります。併しながら刺激の強い場合には尙ほ此球が埒の外に飛出す虞があります(鞭を以て激しく球を打つ)。實際斯様に飛出します故に是では精神の修養が未だ充分でありませぬ。故に寧ろ心を縛るがよいと古の聖人は考慮されたものと思ひます。縛ると云ふ意は即ちイマシメ(戒)と云ふ言葉に當る。斯う云ふ風に精神を縛りつける(糸を以てゴム球を縛す)。是は同じゴム球であるけれども、甲の如く前後左右と上にも下にも動きませぬ、此の如くいましめ置いて之れを刺激すれば(鞭

にて球を打つ。甲球はコロコロ致します。けれども、縛つた乙球はコロコロ致しませぬ。刺激が強ければ飛上るけれども元へ還りますからして戒めると云ふ言葉は埒より一層力が強ふござります。言換へれば、イマシメと云ふ言葉は、コロコロする心をコロコロせぬやうに縛つて置くと云ふ意味であつて、精神の修養と申すとは即ち之であると信じて居ります。然り而して無形のもの縛つて置く譯に往かないと云ふ説があります。成程それに相違ございませぬ。實際何うすれば縛つたと同様なことが出来るかといふに、例へば日本國民として忠孝を忘れてはならぬ、明けても暮れても忠孝を忘れてはならぬ、と思つて居れば恰も我が心を縛つて居ると同じ事であり。軍人としては明治十五年一月に下し賜はりたる五ヶ條の勅諭を守らなければならぬと決心して、常に忘れずに居れば、恰も五ヶ條を以て我が心を戒めて居ると均しいものであります。不忘^{わすれぬ}と云ふことが戒めと同じ意味合になります。

斯様にして精神を修養することは世界通じて同じことであると思ひます。我邦に於て忠孝の繩を以て縛しめると云ふことも、儒學に於て五倫五常を以て縛しめめるのも、佛耶兩教に於て十戒を以て縛しめめるも皆同じことであると思ひます。即ち我が心を此等の箇條を以て縛しめて居ります。數年前のことでありますが一つの器械を拵へまして、道徳の教育について暫くの間用ひて見ました。けれども、至つて器械が重うございまして持歩きに不便でありますから、其代りに昨年九月より今日まで此球と紐とを用ひて居ります。結局精神の修養には聖賢の教を守るより外に途はないと信じて居ります。

次には大和魂と云ふ觀念に就いてお話を致します。世界は一般に前述の精神修養法を用ひて居ります。然るに我が日本に於ては大和魂なるものがあります。扱其大和魂と云ふものは如何なる性質のものであるかと云へばそれは忠良易直の性質を具備するものであります。忠良易直は和訓で申しますれば、

大和魂性質

忠	マノニ	ヤサシク
易	アツサリ	スナホ

良 マメニヤサシク、アツサリ、スナホとなる。此の如き性質を備へなければ大和魂といはれない。忠については後で申します。

ヤサシクは亂暴の反對でありますが、其一例としてお話を申せば、去る明治三十八年に上村大將が我が艦隊を率ひて蔚山沖で敵國の艦隊を撃沈されて歸りなされる途中に於て救を求めて居る敵國の軍人を見て同大將は、氣の毒であるから一同救ひ上げろと命令せられた。其爲めに救ひ上げられた者は其數七百有餘名であつたことは、どなたにも御承知である。世界の人はこの事を聞いて何と言つたかと申せば、日本人は奇態だ、非常にやさしき處がある、耶蘇教國の人も及ばぬやうなやさしいことをすると評したのであります。即ち私の直接耳にした處でも、戰爭中多忙なのに七百何名と云ふのを救ふなんと云ふことは馬鹿げた話ぢやないか、打遣つて置いてよいのに、乃公の國なら打殺してしまうのだと云つた人があつたと聞いて居ります。然るに事此に出でずして、世界の人が非常に上村大將の行動を歓迎した。斯様な點が即ち大和魂の長所である。と申してよからうと存じます。

それからアツサリは、丁度、花は櫻木人は武士と云つて居りますが、即ち吉野の花の如きはその例に

いつも出るのでありますが、あの吉野の櫻の花は豫て御承知である通り、土地に住居する人ですらも満開を見ぬことが出来ぬと云ふ位に、開いたかと思へば忽ち散つてしまふ位のものである。私参つた時にも實際さうでありました。まだ十分に開いて居ないから、明朝は丁度好い頃であらうと云つて、一夜明けて翌日参いつて見た時は既に其花は満開して、花瓣が雪の如く散つて居りました。斯様な處が即ちアツサリしたものだと云ふ意味の様に思はれるのであります。そこで彼の本居宣長が三十一文字にされた。

敷島の大和心を人とはば

朝日に匂ふ山ざくらばな

朝日が輝いた處へバツト開いて直ぐに散る。さまをお詠みになつたものと思ひます。

夫れ此の如き性質を備へて居る魂は、すなほであります。すなほと云ふ意は眞直と云ふ意であります。

眞直なものはいくらでも澤山合せることが出来る（一圖）。何萬本あつても合ひます。然るに曲がつたも

一圖 二圖 のは僅か二本でも合はせることが出来ませぬ（二圖）。眞直なるものゝ合ふ具合を和



すると申します。何う云ふ具合に和するかと云へば少し滑稽的のやうでありますけ

れども、禾は稻に喩へて宜しいのであります。稻は人類の食物であるから、其稻の實つて居る處（甲）へ

甲 乙 口扁を附けると喰といふ字になります（乙）。口と食物であるから能くあいます。故



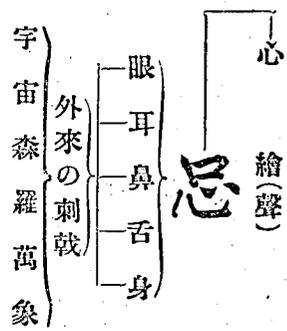
に食したるものは消化して元に戻ることなく和合致します。和と云ふことは此の如

く口と食物の様に親しみ、一旦親み合ふたら離れぬといふ意味を有つて居るやうであります。そこで大和と書きますれば、口と食物以上の親みを以て合すると謂ふ義になります。故にヤマト（大和）と云ふ名も、やはらぎ合ふて止まるといふ意味であらうと思ひます。即ち和合して離れないといふ意味を有つからしてヤマトなる言葉の意味は即ち一致協同である。和合して離れぬことをヤマト（大和）と解釋するのが穩當であらうと思ひます。

前に申した精神の修養は一定の戒で極まつて居ります。然るに我國で大和魂と云ふものを何うして作るかと云へば、忠孝の道であります。忠孝の道を以て養へば大和魂が出來ます。茲に於て忠孝の説明に關する愚見を述べます。

忠を解剖すれば左の通であります。先づ忠の字は上に口があつて其下に心といふ字があつて、堅に―を以て上下を關聯してあります。我と稱する所の我は口と心との兩つによつて宇宙の森羅萬象に感じて生存して居るが如くに見えます。即ち外來の刺戟を感じ續發して起こる所の現象を未前に察知して適當に處置すれば、即ち我身を全うすることが出來ると云ふ意味になつて居る様であります。心といふ字の講釋は無用と思ひますが、是れは心臟の形に由りたる形象文字であります。心臟の働き居る間は眼も動き手足も動いて居る所を見て古人は身體を支配する所の精神が之に宿つて居るものと信じて居つたのであります。而して心は外來の刺戟に感ずれば忽ちに之に應じて聲を發します、そこで眼耳鼻舌身を刺激す

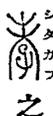
るものは、宇宙の森羅萬象である。眼に物を視て心に感じ、耳に音を聴き何の音であると心に感じ、麝香の香を嗅げば、麝香であると心に感じ、甘いものを舌で舐めれば是は甘いものだとして心に感じ、身體が物に觸接すれば熱い寒いを心に感じます。聞く所に據りますれば、聲と云ふ字は心繪であると云ふことであります。吾人が五官に依つて感じた所を心に繪くのが即ち聲だと云ふことであります。是れで能く分ります。電光を見れば電光と云ひ、麝香を嗅げば麝香と云ひ、舌は砂糖を舐むれば砂糖と云ひ氷に觸れば氷と云ひます。本來我が日本帝國は二千五百七十三年前に建設せられたれども國字なきが故に千數百年の間歴史は世々の昔語家に由て間違なく如何にして傳へられたでありましたやうか。今日の人では今



日朝聞たを夕に傳へても間違ふ位のものであるのに古人の間違なかりしは實に不思議と申しても宜しい但し忠の意義に依れば充分説明し得らるゝ様に思はれます。即ち此拇指を見ては拇指といひ、食指を見

ては食指といひ、薬指を見ては薬指といふ様であれば決して間違ふ譯がない。丁度今日の蓄音機同様であります。蓄音機の平面盤を針を以て刺戟すれば喇叭から聲を發して、何度でも同じことを繰返します。

忠は我と宇宙との關係を示したもので、我と云ふ五尺の身體を保護して安全に維持するには、心の感じたる刺戟を案内として其れに續いて起こる處の現象を能く了解して適切に措置する事が吾人の宇宙間に生存する一定不變の方法であると思ひます。

忠孝の二字は和訓では何と讀むか、是れは「マメにシタガフ」と讀むべきであると思ひます。之

は孝の篆書であります。シタガフと云ふことは隨伴すると云ふ意義であつて物の後について行くの義である。の後にはが進み行く形であります。之をシタガフと云ふ又順と云ふ字をシタガフと讀みます。順と云ふ字の川扁を假に顯微鏡で見るとすれば、川の水は即ち水の分子の如く並んで居るのである。水の分子が後から後からと流れて居る間は水面砥の如くであります。水の分子が相互の關係を變せず流れて居れば之れを「順」と申す。「頁」は丁度軍隊にすれば隊長の資格を持つて居ります。三列を組め、前へ進めと云ふ譯であるから、一二、一二といふ形で附いて行くと同じ意味を有つて居ります。人間は生れ、ば必ず死ぬ。生れてから死ぬまでを人生と云ふ。人生は波瀾が多い。支那では、之を喻へて荆棘と見たのであります。生れてから死ぬまでは百難を排して行かねばならぬ。學生なれば先づ入學試験を受け、それから學期試験、卒業試験等を受けて及第するはを兩手に持ち、荆

棘を押倒して行く様なものであります。

然らば Ψ は何であるか。本來は宇宙の眞理である。眞理とは人力を以て左右することの出来ないものである。太陽の東に昇つて西に没し人生れて死するが如きは如何ともすることが出来ませぬ。吾人は此眞理の前に立て、行かねばならぬ、即ち眞理に則とらなければ生存が出来ませぬ。今茲に眞理の一例としてお話致します。人は攝氏三十七度の體溫を持せざれば生きて居られませぬ。三十七度以上になれば、體が熱くなつたり、惡寒さむけがしたり、頭痛がしたり、咽喉が渴ひたり致します。體溫が三十八度三十九度四十度にもなれば、ソレ熱さましか、ソレ醫者とかといふて心配する様になります、即ち三十九度四十度となれば死亡の虞があるから人が苦勞致します。生來最も注意を要するは、攝氏三十七度以上に體溫を高めぬやうに攝生することでありませぬ。吾人の身體を維持するに缺く可からざる所の天則であります。然るに火と云ふものは高度の熱氣を有するが故に一寸吾人の指が觸れても直ぐに爛れます。赤兒の時に、父母が火の側に吾人を置かず、ランプの側を避けなどし後には火を大事にせよと戒るのは外ではない、侵す可からざる眞理があるからであります。其眞理に違ふときは身體を害す、即ち俗に云ふ火傷をする。若し父母が注意して呉れなかつたならば、頭が藥罐の様になつたり、耳を失ふたり、或は燒死もする。斯様な大怪我をするのは何の爲めかと申せば即ち三十七度以上に其部分を熱した結果であります。之に反して、體溫三十七度以下になれば寒くなるから外套を用ひたりストーブを焚いたりして三

十七度を維持せんことを勤めますのは三十七度以下になつても矢張り病氣をして死する虞があるからであります。氣中動物なる人間は水中に生活する事が出来ぬから、子供の中には父母が海や河や池などへは決して行てはならぬと戒める所以であります。又飲み且つ食へば體温が遽に昇つたり或は降つて人を殺すことがあります。斯様なものを名づけて毒物と云ひます。吾人々類は父母が此の如く保護して即ち三十七度以上に體温がならぬやうに、又三十七度以下に下らないやうに注意し、且つ飲み且つ食して、或は體温が昇り、或は降つて命を失ふことなからしむる様に世話して呉れるので吾人は無事に生存するのであります。此の如き勞を取ることを名づけて父母の恩と申します。

吾人の知識は父母の授け得る丈にて足るのかと申せば、吾人には未だ不足であります。生存して社會の人となり、死出の山路に掛かるまでには尙ほ知識を要します。又其働きを實際に爲し得るやうな習慣を養はなければなりません。それには指導者を要す。父母には出来ぬかと申せば、敢て出来ぬと限つたものではございませぬけれども、衣食住其他の爲めに多忙にして、我が子に必要と思ふだけの知識を自ら傳へることが出来ませぬから、熟議の結果、乃ち堪能な人を置いて此に多くの兒童を集めて教授して貰ふたならば簡便に出来て都合が好からうといふ相談が纏まつたものと見るべきものが即ち今日の學校であります。故に學校なるものは父母の手の届かぬ處を補ふ爲めに設けたのであると云はなければならぬ。依つて學校長は即ち家長である、女教員及び男教員等は即ち子供の兄様姉様のやうなものである

と信じます。即ち是れ等の親や、兄や、姉が相集まつて生の親の及ばぬ處を助ける。喻へて申せば、親が玉を造つたが未だ磨いてないから、其の磨き方を學校の先生にお頼み申すといふことになつて居ると見て宜しい。即ち磨いて初めて玉になる。如何なる場合に玉になるかと申せば、小學校なる尋常六年を卒はり、尋常科を修了したいといふ證書を貰へば則ち國民の一般教育を卒はつた者と云ふ玉になる譯であります。中學校になれば矢張り中學校卒業生になつた時がそれだけの玉になつた。即ち生の親が圓く拵へたが、光を放たぬければ値打がない。そこで磨き上げる。磨き上げて何うなるかと云へば、自分の姿が其玉に映る様になる。姿が映る様に磨いたと云ふのは何を言ふか。學問をすれば自分の目的とする學問を十分に習得して其目的を達するに足りるだけの人物と相成つたと云ふことを意味するのであります。是れぞ則ち古から申すところの師恩といふべきものである。此に於て幼少の時の生の親の教育並に學校に於ける教員の教によつて一人前の人になるといふ譯になります。此教ほど大切なものはない。それは何を教へるかと申せば宇宙の理法に適つたものを教へるのであります。取りも直さず宇宙の眞理を應用すると云ふことに外ならぬのであります。斯様な譯でありまして、此の Ψ が父母の教と云ふことになります。此の父母は兩方（生みの親と師）を含む。父母の教に順へば人は繁昌致します。即ち孝したがふといふことは父母の教に順ふので、其教は宇宙の眞理其ものであります。此の如く宇宙の眞理に則つて養ふ處があれば則ち不和とか不愉快とか云ふ如きことも起こらずに、圓滿に、愉快に其々今日の行

動を爲すことが出来るやうになるのであります。

忠孝を此の如く觀すれば、忠孝は宇宙の眞理に則つて國民の幸福を圖ると云ふことになります。前に申上げた通りでありまして、忠と云ふ字は吾等の感ずる事あれば自然に必ず口に出すの意味を有する文字であります。是は外より由來したものだから、其儘に外に出てなければならぬと云ふ道理になります。依て國民は皇恩に依つて其生を樂んで居りますからして、之に對しては毫釐も違ふことなく報ずる所がなければならぬ、之を忠節と申して適切と信じます。

忠孝は宇宙の眞理であつて、大和魂を養ふ唯一の滋養物であるから能く之を辨へて能く之を應用するには深き研究を要す。隨つて知識を廣く世界に求めなければなりません。明治の初頭に明治天皇陛下「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」又明治二十三年の十月三十日に賜はりし教育に關する勅語の冒頭に「我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられてあります。即ち國を經營遊ばすに就いては世界中の有ゆる知識を研究して、苟も採つて以つて國家に益するものなれば漏さず御採用遊されたぞとの御意であるやうに乍畏伺ひます。古來大和魂の養成に就いて之を歴史に求むれば、千百有餘年前、聖德太子の御時代に在つては儒道佛道の二教で、惟神の道即ち忠孝の道を補翼すれば大和魂は健全に發達すべきを以て之を懈つてはならぬと教を垂れたものである様に承はりて居ります。即ち千百有餘年間神儒佛の三道を以て大和魂を養ひ、明治元年に至り其極度に達して數百年の間亂

れたる政體を整理して以て明治の聖代を生出したと言へるだらうと思ひます。然るに其由つて來る所を深く研究せず、唯々目前の事にのみ汲々とした結果は大和魂の病氣になつたものと信じます。大和魂の病氣は何方も御承知のことでありまして、明治元年以來年々其勢ひを違うし、明治二十三年頃に至つては最早捨置き難し、藥を以て治さなければならぬといふ程度に進みましたので、遂に明治天皇陛下より御藥を賜はるることになりました。其御藥を稱して教育に關する勅語と唱へます。此御勅語に依つて、大和魂の病氣に罹らざるやうに致し、又一つには既に起こつて居る病氣は之れを以て治さん爲めの御藥であると信じて居ります。爾來即ち明治二十三年十月三十日以來は、行政の當局者並に教育家諸君が御匙の役を承つて此御藥を盛つたのであります。而して藥は良いだけ亦盛手にも怪我をさせるやうなことがあります、明治三十六年には、當局者が數十名怪我をされて鍛治橋の監獄に御入院なされたと云ふことも諸君は御承知でありませう。其邊で大和魂の病氣が治つたかと云へば、なか／＼治りませぬ。明治元年以來漸次大和魂の健康が悪くなつて、明治四十三四年に至りまして再び低き程度に降らんとするやうな勢ひを示しました。大和魂の意味は我が國氏は同じ道に出で、同じ道を辿る、即ち億兆心を一にすると云ふことであるから、今日の様に甲乙丙丁黨派を組立て之れを以て右往左往に行動するが如きは大和魂の極意と相反する様に思つて居ります。

最後に一言申上げます。國體の精華は如何なる基礎の上に開くかと云へば忠孝の幹根に開くのであり

ます。圖に示すが如し。



忠孝を養ふには小さい根からして世界の知識を吸収し其の滋養物と致さねばならぬ。儒教でも佛教でも同化して皆な忠孝の滋養物と爲しますから大和魂は何が外から來ても總て之れを同化する作用を有つて居るといふ事が出来るのであります。此の如くでありますからして、帝國憲法に於て國民に信教の自由を許させ賜ふたものと信じます。神道を信じても佛教を信じても儒教を信じても、耶蘇教を信じても宜しい。深く諸教を窮むれば忠孝の道の外に出るものは一つもない。何となれば忠孝は宇宙の眞理であからであります。

わげのぼる麓の道は多けれど

同じ高嶺の月をみるかな

信教と云ふ問題に就いて嘗て承つたことがあります、教とは宗教のことであると聞きました。果して宗教と云ふ字でありますれば宗教も教育も一つになる。帝國教育と云ふものが帝國宗教々會と云ふものになります。教と云ふ字は必しもさう云ふ意味ではあるまいと思ひます。教の字を篆書に致して考へ

ますれば、キマリといふものを置いて之について行くことを一纏めにして、人は是れだけの事を知行せねばならぬと纏めて知らしむるの意であります。扱其キマリを喻へて見れば一と云ふ字であります。一と云ふ字に止と云ふ字を附けると正となる。一なるキマリに附いて離れなければ正と云ふ意味になります。夫故にキマリ通りにして居れば正しい、キマリ通りにしなければ正しくないと云ひます。結局キマリ通りに諸事を取纏めて行けば教と云ふことになるのであります。

先づ精神修養に就いて私の豫て心得て居る處を一通り申し上げますれば前述の通りでございます。是れで御免蒙ります。

大君の御ことにしあれば父母を

いはひべと置きてまいで來にしを（萬葉集）